

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年 6月11日現在

機関番号：10101

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2010～2012

課題番号：22520382

研究課題名（和文）日本語の語彙と構文の分析から体系化する語彙推意と構文推意の理論

研究課題名（英文）Theoretical Studies on Lexical and constructional Implicatures: from Analysis and Description of the Japanese Lexicon and Constructions

研究代表者

加藤 重広 (KATO SHIGEHIRO)

北海道大学・大学院文学研究科・教授

研究者番号：40283048

研究成果の概要（和文）：この研究では、従来の推意を語彙推意と構文推意に分け、それぞれが日本語の語彙と構文の研究において有効であることを具体例とともに提示したものである。語彙推意によって、語の意味のうち、必須の部分と取り消し可能な部分が両方とも説明できるようになった。また、日本語における構文推意は、受動構文や可能構文など幅広く適用可能で、いわゆる中核的意味に含まれない解釈を理解する上で有効であることが論証された。

研究成果の概要（英文）：This study proposes the distinction between lexical and constructional implicatures, with which the previous concept of “implicature” should be replaced and refined. Lexical implicature, which has been proposed in this study, can account more precisely for the semantic mixture of core meaning and implicature. The latter helps analyze the semantic properties beyond the intrinsic sentence meaning.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,300,000円	390,000円	1,690,000円
2011年度	1,100,000円	330,000円	1,430,000円
2012年度	700,000円	210,000円	910,000円
年度			
年度			
総計	3,100,000円	930,000円	4,030,000円

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学

キーワード：推意、語彙、構文、語用論

1. 研究開始当初の背景

語用論における推意(implicature)の概念は、H. P. グライスによって提唱されたもので、その協調原理とあわせて現在の語用論研究の基盤となり、言語学の進展に寄与した。しかし、この「推意」の概念は、非常に曖昧で、分類体系に不整合があるなど、当初から問題点があることが指摘されて来た。過去20年ほどの研究の進展の中で、さらに細分化することも含めてその概念の精緻化がなされて来

たが、いまだそれぞれの理論的枠組みの一部として抽象的な例示にとどまり、個別の言語現象を分析する上では十分な装置たり得なかった。加えて、類似の概念で分析装置たりえる前提や含意などとの整合性にも問題が見られた。本研究では、これらの問題点を解消するため、有効な分析装置たりえて、かつ、他の論理概念と十分に整合するものとしての「推意」を整備し直し、言語研究における語用論的研究を大きく進展させる必要に迫られ

ていた。

2. 研究の目的

言語分析、なかんづく、語用論的分析を行う上で、実用的で簡便な分析手法を開発し、それを理論的研究に還元することを目的としている。特に、日本語を例に、分析方法の提示に加え、日本での言語研究では比較的手薄になっている理論面への貢献も行うことを目指している。

3. 研究の方法

主として、理論的な方法による。語用論的分析に先立って文法論的分析が必要であることから、文法論的分析を先に行う。これまで十分な分析の蓄積がないテーマであることから、分かりやすい分析例を提示しつつ、理論構築をはかり、研究の必要性・有効性が理解されるように進める。特に、調査は予定していないが、必要に応じて実験的手法を利用する可能性は排除しない。

4. 研究成果

本研究は、日本語を対象言語として、構文レベルの推意と語彙レベルの推意にわけ、データの蓄積・データの分析・理論的分析・類型化・一般化などを行い、文法化や言語構造の普遍性に関する理解を深めて、語用論的研究の枠組みに対する再構築の提言を行うことを目的としたものであり、当初の計画に沿う形で研究工程を終えた。

推意(implicatureの訳語として以下統一的かつ一意的に用いる)は、グライスにより提案された時点で、慣習推意(conventionalized implicature)と会話推意(conversational implicature)に区分されているが、前者は取り消し不可能でありながら推意という名称を命じられている不合理があり、統語論とのインターフェイスでの研究が進んでいる前提(presupposition)の区分はそれまでの分析の軌跡を反映して独自の整理がなされているため、推意と前提のあいだにはまったく整合性がない。これは、語用論研究の基本的な方法論が十分に科学的なものとして整えられていない事実をはしくも語るものである。

本研究では、前提がそのトリガーによって従来なされてきた2区分、語彙的に形成された前提(lexically triggered presupposition) (以下、「語彙前提」と言う)と構文的に形成された前提(constructionally triggered presupposition) (以下、「構文前提」と言う)に、文連続のレベルで生じる前

提として「テキスト的に形成される前提(textually triggered presupposition)」(以下、「テキスト前提」)を新たに提案して加え、3区分とすることを提案した。

さらに、トリガーの単位的区分について、前提と推意を対応させ、語彙前提・構文前提・テキスト前提に対して、語彙推意・構文推意・テキスト推意の3区分を案出し、それぞれを定義した。

語彙推意(lexical implicature)は、特定の語句について生じるもので、これまで共起制限として語義記述に用いられてきた情報も語彙推意に含めうる。しかし、これまでは語義記述の中で付加的情報としか見なされなかったものについても、語彙推意には含まれる。例えば、「笑う」は、有情物が行為主体となるが、これは有情性を主語名詞の共起制約としなくても、「笑う」主体は通常有情物だという命題形式の推意として示すことが可能である。語彙推意は、われわれの現実世界に関する経験的近くの蓄積を基盤とするので、現実世界 W_0 で強く求められると考えることができる。空想世界 W_1 では、この整合性の圧力は低下するので、童話の中では「椅子が笑う」ことはありうるが、 W_0 ほど意味計算の負担は小さくならず、当該世界 (W_1) の整合性を担保させながら意味計算と推論を行う必要が生じる。現実世界という計算領域をあらかじめ想定すれば、デフォルトの世界知識が適用され、当該世界 (W_0) の整合性は弱い調整(整合性を崩さないようにする)程度で済むので計算負担は小さい。概して、 $W_1 \dots W_n$ はその内部での整合性について知識を調整しなければならないため、意味計算の負荷が増大するが、細部については現実世界の知識を転用することで負荷が増大しないようにするシステムもあると見られる。

日本語の「とる」という動詞については、内項のAの存在領域が「とる」前と後で変化するという語彙推意を例示した。「太郎が帽子をとる」でも、着帽状態なら脱帽することで存在場所が変わり、陳列棚からとる場合なら、太郎の手へと存在場所が変わる。特に、動作主の領域へと存在場所が変わる場合は、永続的な存在場所と解釈され、所有権も移行する、また、それによってその事物が当該領域に蓄積する、という推意が記述できる。「太郎が木になっている柿をとる」場合がこれに該当するが、当然のことながら推意なので、語彙推意も取り消すことが可能である。「年をとる」など、事物の存在場所の変更という意味が後退し、対象の蓄積だけが推意される例もある。

語彙推意のなかには、転義（慣用表現の形成も含む）によって、推意の固着が進んでしまう場合がある。推意の固着は、グライスの言う慣習推意に近づく変化でもあるが、それによって、推意の本来的特質である取り消し可能性が抑制される。語彙推意の記述は、体系的に行えば、新たな辞書の語義記述法の開発にも資すると思われる。ただし、そのためには、一定数の語句について分析例や記述例を増やさなければならない。本研究では、具体例とともに、その原理を明らかにしたが、分析例は継続的に充実させていく必要があり、今後は語義記述の開発という実用的な研究へと展開させたいと考えている。

構文推意 (constructional implicature) については、いくつかの具体的分析例を提示した。例えば、日本語における可能過去の遂行読みが一定の普遍性を持つことと遂行過去との共存を持つ意味を明らかにすることができた。「小説を書き上げられた」は「書き上げた」の意の遂行読みになるのが普通で、これが構文的推意となる。「書き上げられたが、書き上げなかった」のように、遂行を明示的に否定すると非遂行可能状態過去の解釈にできるが、推意の取り消しには一定の条件があることも明らかになった。また、「書き上げた」という遂行表現と「書き上げられた」という遂行推意では、後者に遂行を確定的に見通せなかった（結果に自信がなかった）というメタ推意を誘発することも分析では触れた。メタ推意は、一次的な推意からさらに生じる二次的推意であるが、両者の成立は独立しており、一次的推意が成立して、二次的推意（メタ推意）だけを取り消すことも可能である。さらに日本語の運用上の選好 (pragmatic preference) が文法を形成するという見方にたつて、可能過去がメタ推意から「謙虚さ」というフェイスワーク上の効果から単なる遂行表現よりも選択される強い動機になることを示した。

ほかにも、認識系の複合助動詞やその類似形式「はずだ」「つもりだ」「ことになっている」などについても分析を行い、これらの種々のモダリティ表現が、非過去形（ル形）と過去形（タ形）とで推意に関して明確な違いがあることを指摘した。構文推意が生じるのは、これらのタ形であり、ル形では同様の推意がまったく生じない点は興味深い。この現象の総合的記述と分析には、タ形の分析と形式名詞の特性の理解が重要であることから、あわせてその点もぶんせきしている。例えば、テンスでもアスペクトでもない「た」のモダリティ用法から、「た

」そのものの意味を統一的に記述すること、日本語における形式名詞が関わる文法化がいくつかの普遍的特徴と関わっていることについても明確化して、その成果をまとめた。

また連体修飾節における形容詞のタ形が持つ構文推意についても、同様に指摘した。その総合的理解のため、これまでの連体修飾の理解や従属節形成の原理についても検証を加えている。その結果、形式名詞を用いた複合助動詞の用法の中に、日本語の類型的特性を示す変化があることを指摘した。日本語における助動詞の文法化を「節減少」や「非節化」とする、この考え方は独自の新たな知見として本研究で得た成果である。この傾向は、日本語が右方述部の言語であるという類型的特性と関わっているが、それを前適用とする機能転用として発達していると説明できる。この現象の根柢にある、S-o-M原理（意味優位原理）は文法化の動機に関わる普遍的な考え方であり、言語研究全体に貢献する可能性を持つ重要な提言であると考えられる。

構文推意の具体的分析としては、日本語の構文の派生を格シフトから記述するために、《降格》と《昇格》を明確に定義し、その記述のための格助詞の区分（非斜格・第1～3斜格まで）をまとめた。以上の枠組みを用いて、受動構文に関する分析を行い、従来直接受動・間接受動とされていた区分を、定義し直し、それぞれを対称受動と非対称受動として、詳細に分析した。その結果、非対称受動が従来迷惑の受け身と言われてきた「迷惑性」の解釈について、その本質が構文推意であることを論証した。

あわせて、使動構文に関する記述を行い、昇降格に関わる制約を二重ヲ格制約と関連づけて明確化した。二重ヲ格制約は、従来、形態論的な制約とすることが多かったが、他の多重格制約と同様に意味計算に関わる語用論的制約であり、意味的な分化について対格が他の形態格に比して不明確で弱いことを明らかにした。結果として、二重ヲ格制約が従来一部で主張されていたような形態論的制約ではなく、意味的な制約であって、そのなかには意味計算の負荷といった語用論的特性が関与していることを新知見として提案している。

なお、受動構文については、非対称受動と対称受動が昇降格の観点から明確に定義できることを示し、両者の意味的差異が、構造的な違いだけでなく、視点者追加などの認知論的観点から捉えるべきことを指摘している。加えて、受益構文が推意ではなく、統語的意味であって、

推意と同じように取り消し可能な解釈ではないことを、受益構文と非対称受動文の平行性を確認した上で、その成立に関わる意味特性の差として論じた。

このほかに、属性叙述構文についても6つのタイプに分けて、個々の特性を明確にした。これによって、ガ格がより基幹性を帯びて用いられることを指摘し、その属性解釈が強い動機となって、ガ格の選択を生じさせていることを明確にした。本研究において、語用論的研究の基盤をなす「動的／線条的心理語用論」(dynamic/ linear psychopragmatics)の枠組みについても、以前の研究成果を発展的に整理する形で、見直しを加え、演繹的文脈論として、記憶処理の点から文脈を3つに分けて、詳細に定義する作業も完成させた。本研究の中で提案したテキスト推意については、簡単な例示に留めているので、今後より深めていく必要がある。これを含めて次の段階に研究を進展させる上で必要なことについて整理を行った。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計5件)

①加藤重広「日本語における文法化と節減少」『アジア・アフリカの言語と言語学』vol.5, 2012年, 33-57 査読有

②加藤重広「コンテクストと前提」『ひつじ意味論講座』第6巻, ひつじ書房, 2012年, 39-62 査読有

③加藤重広「日本語における名詞性 一名詞らしさの境界と段階」影山太郎・沈力編『日中理論言語学の新展望』3, くろしお出版, 2012年, 51-76 査読有

④加藤重広「属性の事象化と一時性 一標準語と方言の差異に着目して」影山太郎編『属性叙述の世界』, くろしお出版, 2012年, 113-141 査読有

⑤加藤重広「世界知識と解釈的文脈の理論」『北海道大学文学研究科紀要』134巻, 2011年, 69-96 査読無

[学会発表] (計2件)

① Kato, Shigehiro " Clause Reduction and Pragmatic Preference in Japanese" International Workshop on Cross-linguistic

Studies on Clause Combining (2011年11月13日) 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所

② 加藤重広「複文の単文化 一節性と非節化」国立国語研究所共同研究プロジェクト「複文構文の意味の研究」ワークショップ, 2011年12月17日, 大学共同利用施設ユニティ (兵庫県神戸市)

[図書] (計1件)

① 加藤重広(2013)『日本語統語特性論』北海道大学出版会, 308頁

6. 研究組織

(1) 研究代表者

加藤 重広 (KATO SHIGEHIRO)

北海道大学・大学院文学研究科・教授

研究者番号: 40283048

(2) 研究分担者 なし

(3) 連携研究者 なし